



Title	高齢者のMultimorbidityに対する多職種連携の有効性
Author(s)	齊前, 裕一郎
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101869">https://hdl.handle.net/11094/101869</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名(齊前 裕一郎)	
論文題名	高齢者Multimorbidityに対する多職種連携の有効性

## 論文内容の要旨

同程度の重篤性を持つ複数の慢性疾患が共存する状態であるMultimorbidityは、高齢者において一般的であり、特に先進国において21世紀における最も重要な健康課題の一つである。Multimorbidityは、従来の単一疾患の治療ガイドラインのみでは対応が困難であり、個別かつ包括的なケアが求められる。国際的なガイドラインでは、多職種連携による個別の対応が推奨されているが、効果的な介入方法のエビデンスは不足している。特に、心不全を合併したMultimorbidity高齢者は、再入院や死亡率が高いことが報告されているため、本研究では心不全を合併したMultimorbidity高齢者を対象とし、病院【研究1】と在宅【研究2】の双方で多職種連携の有効性を検討した。

**【研究1】心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対する看護師をファシリテータとした多職種介入の有効性**

目的：看護師をファシリテータとした多職種介入が、急性期病院に入院し心不全を合併したMultimorbidity高齢者の生命予後の改善に関連するかを明らかにすること。

方法：大阪府の急性期病院の単施設における症例対照研究である。研究対象者は400名で、「看護師をファシリテータとした多職種介入群」と「通常介入群」に分類し分析を行った。「多職種介入群」は、入退院支援加算1導入後の多職種介入であり、「通常介入群」は入退院支援加算1導入前の介入である。入退院支援加算1の要件は、退院支援に精通した看護師を専従配置し、看護師をファシリテータとした多職種介入を入院早期から退院まで継続的に行うことである。統計解析にはCox比例ハザード回帰分析を用い、退院後1年以内のすべての原因による死亡と退院後6週間以内の緊急入院との関連を分析した。

結果：研究対象者の平均年齢は80歳、男性が62%であった。看護師をファシリテータとした多職種介入は、退院後1年以内のすべての要因の死亡の減少 (HR; 0.45, 95%CI; 0.29 to 0.69; P<0.001) と退院後6週間以内の緊急入院の減少 (HR; 0.16, 95%CI; 0.08 to 0.30; P<0.001) と有意に関連していた。

結論：心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対する看護師をファシリテータとした多職種介入は、死亡ならびに再入院の減少と有意に関連していることが明らかになった。

**【研究2】在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対するICTの有効性**

目的：多職種連携に対するICTの利用が、在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者の生命予後の改善に関連するかを明らかにすること。

方法：在宅療養支援診療所単施設における後ろ向きコホート研究である。対象者は110名の内、多職種連携にICTを導入した患者を「ICT利用群」、一度も利用しなかった患者を「ICT非利用群」に分け分析を行った。今回使用したICTは共同研究者が開発したものであり、従来のチャット機能に加え各職種の訪問日や訪問時の介入内容をスマートフォンなどでタイムリーに共有できるアプリケーションである。統計解析にはCox比例ハザード回帰分析を用い、ICTの利用とすべての原因による死亡との関連を分析した。

結果：研究対象者の平均年齢は87歳、男性が44%であった。ICTの使用はすべての原因による死亡の減少と有意に関連していた。(HR:0.31, 95%CI:0.11 to 0.86 ; P=0.02)。

結論：在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対するICTの利用は、死亡の減少と有意に関連していることが明らかになった。

### 【総括】

本研究は、心不全を合併したMultimorbidity高齢者を対象とし、病院と在宅の双方で多職種連携の有効性を示した。今後は、看護師をファシリテータとした多職種介入の具体的な有効要因や、ICTの利用頻度および効果的な機能を特定するための前向き研究が必要である。また、健康アウトカムに加え質調整生存率(QALY)を調査し、Multimorbidityの疾患パターンに応じた多職種連携の有効性を解明することが求められる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名(齊前 裕一郎)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	竹屋 泰
	副査 教授	上野 高義
	副査 教授	樺山 舞

## 論文審査の結果の要旨

同程度の重篤性を持つ複数の慢性疾患が共存する状態であるMultimorbidityは、高齢者において一般的であり、特に先進国において21世紀における最も重要な健康課題の一つである。Multimorbidityは、従来の単一疾患の治療ガイドラインのみでは対応が困難であり、個別かつ包括的なケアが求められる。国際的なガイドラインでは、多職種連携による個別の対応が推奨されているが、効果的な介入方法のエビデンスは不足している。特に、心不全を合併したMultimorbidity高齢者は、再入院や死亡率が高いことが報告されているため、本研究では心不全を合併したMultimorbidity高齢者を対象とし、病院【研究1】と在宅【研究2】の双方で多職種連携の有効性を検討した。

【研究1】心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対する看護師をファシリテータとした多職種連携の有効性

目的：看護師をファシリテータとした多職種連携が、急性期病院に入院し心不全を合併したMultimorbidity高齢者の生命予後の改善に関連するかを明らかにすること。

方法：大阪府の急性期病院の単施設における症例対照研究である。研究対象者は400名で、「看護師をファシリテータとした多職種連携群」と「通常群」に分類し分析を行った。「多職種連携群」は、入退院支援加算1導入後の多職種連携であり、「通常群」は入退院支援加算1導入前の介入である。入退院支援加算1の要件は、退院支援に精通した看護師を専従配置し、看護師をファシリテータとした多職種連携を入院早期から退院まで継続的に行うことである。統計解析にはCox比例ハザード回帰分析を用い、退院後1年以内のすべての原因による死亡と退院後6週間以内の緊急入院との関連を分析した。

結果：研究対象者の平均年齢は80歳、男性が62%であった。看護師をファシリテータとした多職種連携は、退院後1年以内のすべての要因の死亡の減少 (HR; 0.45, 95%CI; 0.29 to 0.69; P<0.001) と退院後6週間以内の緊急入院の減少 (HR; 0.16, 95%CI; 0.08 to 0.30; P<0.001) と有意に関連していた。

結論：心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対する看護師をファシリテータとした多職種連携は、死亡ならびに再入院の減少と有意に関連していることが明らかになった。

## 【研究2】在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対するICTの有効性

目的：多職種連携に対するICTの利用が、在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者の生命予後の改善に関連するかを明らかにすること。

方法：在宅療養支援診療所単施設における後ろ向きコホート研究である。対象者は110名の内、多職種連携にICTを導入した患者を「ICT利用群」、一度も利用しなかった患者を「ICT非利用群」に分け分析した。今回使用したICTは共同研究者が開発したものであり、従来のチャット機能に加え各職種の訪問日や訪問時の介入内容をスマートフォンなどでタイムリーに共有できるアプリケーションである。統計解析にはCox比例ハザード回帰分析を用い、ICTの利用とすべての原因による死亡との関連を分析した。

結果：研究対象者の平均年齢は87歳、男性が44%であった。ICTの使用はすべての原因による死亡の減少と有意に関連していた。(HR:0.31, 95%CI:0.11 to 0.86 ;  $P=0.02$ )。

結論：在宅療養中の心不全を合併したMultimorbidity高齢者に対するICTの利用は、死亡の減少と有意に関連していることが明らかになった。

#### 【総括】

心不全を合併したMultimorbidity高齢者を対象とし、病院と在宅の双方で多職種連携の有効性を示した。本研究は、多職種連携の具体的な実施方法に関するエビデンスを提供し、今後の医療政策や臨床現場での実践に貢献することが期待される。以上により、本論文の内容は、科学的/臨床的な価値が高く、博士（保健学）の学位授与に値するものと考える。